

# 農作業や「まちのコイン」で市民交流

## 鎌倉のアルペなんみんセンター

内戦などで祖国を逃れ、日本にたどり着き、難民申請中の外国人たちが身を寄せる国内最大のシ



有川さんとアルペなんみんセンター



地域住民と農作業

た「アルペなんみんセンター」だ。NPO法人アルペなんみんセンターが全国からの寄付をもとに運営し、30の個室を備える。今年11月半ばにはウガンダ、コンゴ、ミャンマー、インドネシア、スリランカなどからの9人が生活を求めた日本では難民と認められない。そのような外国人の中には在留資格を失って入管施設に収容される人も多い。日本の支援者らとつながって「仮放免」を受け、入管施設から出られた人でも難民認定を受けるまでは就労を禁じられる。認定されぬまま5年、10年と月日が経ち、路上生活に追い込まれる人も。「認定率の異様な低さをはじめ難民への冷たさは日本人が難民を知らな過ぎること起因する」と同センター事務局長・有川憲治さんは指摘する。

有川さんは、大学在学中の1980年代にインドシナ難民支援に関わり、以後も東京のカトリック施設などで働きたり、難民支援を続けてきた。有川さんらの努力で多くの難民が救われたが、難民に対する日本社会の無関心や冷たさは変わらなかった。「知らないから怖がる。知らないから避けたい」。難民の人たちもつと交流できる場を作らなければ」。有川さんの長年の思いが形になったのが同センターだった。開設以来一年半ずっと泊まり込んで支援活動をしている。

同センターで暮らす外国人の中には、医師や教員、政府要人警護などの経験者もいる。その境遇ゆえに顔や名前は明かせないが、様々な技能や趣味、特技を持つ。そこで同センターは、IT企業カヤックと鎌倉市が取り組む地域通貨クルッポ（まちのコイン）の加盟スポットに登録。300クルッポの利用で、スリランカ人のリヴィさんか

ら本場の紅茶の入れ方を学べる講座などを開講し、人気を集めている。毎週土曜はセンターの敷地内に作った畑で、入所者と地域住民が一緒に農作業をしている。11月半ばにはサトイモを沢山収穫した。難民を考えるセミナーの定期開催や市内の小中学校との連携強化なども計画している。

リランカなどからの9人が生活を求めた日本では難民と認められない。そのような外国人の中には在留資格を失って入管施設に収容される人も多い。日本の支援者らとつながって「仮放免」を受け、入管施設から出られた人でも難民認定を受けるまでは就労を禁じられる。認定されぬまま5年、10年と月日が経ち、路上生活に追い込まれる人も。「認定率の異様な低さをはじめ難民への冷たさは日本人が難民を知らな過ぎること起因する」と同センター事務局長・有川憲治さんは指摘する。

有川さんは、大学在学中の1980年代にインドシナ難民支援に関わり、以後も東京のカトリック施設などで働きたり、難民支援を続けてきた。有川さんらの努力で多くの難民が救われたが、難民に対する日本社会の無関心や冷たさは変わらなかった。「知らないから怖がる。知らないから避けたい」。難民の人たちもつと交流できる場を作らなければ」。有川さんの長年の思いが形になったのが同センターだった。開設以来一年半ずっと泊まり込んで支援活動をしている。

同センターで暮らす外国人の中には、医師や教員、政府要人警護などの経験者もいる。その境遇ゆえに顔や名前は明かせないが、様々な技能や趣味、特技を持つ。そこで同センターは、IT企業カヤックと鎌倉市が取り組む地域通貨クルッポ（まちのコイン）の加盟スポットに登録。300クルッポの利用で、スリランカ人のリヴィさんか

ら本場の紅茶の入れ方を学べる講座などを開講し、人気を集めている。毎週土曜はセンターの敷地内に作った畑で、入所者と地域住民が一緒に農作業をしている。11月半ばにはサトイモを沢山収穫した。難民を考えるセミナーの定期開催や市内の小中学校との連携強化なども計画している。

有川さんは「ここは単なる避難場所ではなく、苦境を乗り越えてきた難民たちが日本で生きていくための意欲や力を取り戻す場にした。地域の方々の協力で、木工業の見習いや介護研修の受講を始めた人もいる。地域とのつながりを更に強めて、鎌倉から日本を変えていきたい」と話す。

同センターへの寄付は、同センターのホームページからクレジットカードで行える。